

## 日本近代絵画の巨匠 梅原龍三郎展

永井画廊（東京・銀座 8-6-25） 2017.05.09～20



「梅原龍三郎」（1888～1986）は、ヨーロッパで学んだ油彩画に桃山美術・琳派・南画といった日本の伝統的な美術を自由奔放に取り入れ、絢爛な色彩と豪放なタッチが織りなす装飾的な世界を展開して、昭和の一時代を通じて日本洋画家の重鎮として活躍した画家である。

画伯は、パリに留学した際に現地で知り合った「有島生馬」を通じて、1910年に創刊されたばかりの『白樺』に「ルノアール」の近況報告、芝居や絵について寄稿をしている。5年間のフランス滞在を経て帰国後は、白樺者主催の「梅原龍三郎油絵展覧会」の開催をきっかけに一躍脚光を浴びて、画壇デビューを果たしている。

画伯は、巨匠「ルノアール」と親密な関係を築き、制作についての指導を受けており、最近都内と大阪で「拝啓 ルノアール先生」という展覧会が開催され、二人の作品《パリスの審判》が並べられて展示され脚光を浴びていた。

本展は、永井画廊の新装オープン記念第一弾として開催されるもので、展示品は「梅原家」のご理解・ご協力により代表的なモチーフの中から厳選した《ひまわり》（写真）《花》《純子像》などの油彩、戦後アトリエで親しんでいた《軽井沢風景を描いた水彩》、デッサンなど約20点が展示されている。



《ひまわり》 油彩・カンヴァス 100 x 80cm  
1975年制作

銀座8丁目の「河北新報ビル」は、かつて「徳富蘇峰」が「国民新聞」を発行していた場所で、河北新聞社が戦後買い取り、1962年に「東京河北ビル」を建て東京の拠点としていた。今回、会社創業120周年記念事業として新ビルを建設したもので、永井画廊はビルの5階にある。